

震災復興の 10 年

—宮城県山元町から—

田代 侃 (山元町震災復興 土曜日の会)

1. はじめに

東日本大震災が起きた 2011 年 3 月 11 日から早くも 10 年を過ぎた。山元町震災復興計画は 8 年間、2019 年で終わり、今も続いている付随工事も今年度でほぼ終了する見込みである。社会インフラや居住施設が復旧したからといって震災復興が終わったわけではない。震災の多様な爪痕は深く残り、社会環境、自然環境の修復再生には長期間を要することだろう。

少子高齢化、人口減少の中での復興は困難である。震災後の若年層の町外流出により、山元町の人口は震災前 16,704 人であったが、今や 11,956 人に減少した。その結果として山元町は過疎自治体の指定を受けている。自然環境については防潮林が植林され、海浜の生態系が再生しつつあるものの、集落の屋敷林と農地の境界林は失われたまま再生の見込みはなく、里浜の風景は変わってしまった。

震災の被害と復興には、その地域の地理、地誌が深く関わっている。この発表では山元町における遺跡発掘を含めて大津波の伝承に焦点をあてて考察する。

表 1 山元町の地震・津波の概要と被害状況^{*1}

地震の概要		被災状況	
発 生 日 時	平成23年3月11日 (金) 14時46分頃	[人的被害]	
震 源	三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)	●死亡者数：637人 (遺体未発見の死亡届17人および震災関連死20人含む) 当時人口 (16,695人) の約4%	
規 模	マグニチュード9.0	●避難者数：5,826人	
震 度	山元町震度6強	●避難所数：19カ所	
津波の概要		[家屋被害]	
津 波 襲 来	3月11日15時50分頃	●住宅4,440棟に被害	
最 大 波	12.2m (磯浜海水浴場付近)	被害の内訳	
浸 水 範 囲	24km ² (総面積の37.2%) 海岸沿い6行政区の全域および丘通り4行政区の一部が津波により水没	全壊2,217棟(うち流出1,013棟) (50%) 大規模半壊534棟 (12%) 半壊551棟 (12.4%) 一部損壊1,138棟 (25.6%)	
推定浸水域にかかる人口	8,990人 (当時人口の53.8%)	[産業関係への被害]	
推定浸水域にかかる世帯数	2,913世帯(当時世帯数の52.4%)	●農地面積の約59% (1,416ha) に浸水 ●水田の69%、畑地の45%が冠水 ●いちご農家被災件数 125/129戸	

2. 山元町の津波被害と復興

(1) 津波被害の概要

山元町の地震・津波の概要と被害状況を表1に示す。その他に物的被害として、電気、水道、通信、交通、公共施設、商業施設などがあり、生活基盤のすべてが失われた。また、計数できない被害として、コミュニティ、無形文化財、自然環境などの損失も甚大だった。津波浸水範囲は図2に示した。

(2) 震災復興の概要

震災復興は国土強靱化、内陸移転、コンパクトシティを基本方針として行われた。山元町震災復興計画の要点は図1の土地利用計画として示される。震災後10年にして、防潮堤と2線堤の造成、常磐自動車道の開通、JR常磐線の内陸移転、防災集団移転による新市街地の形成などの膨大な事業はほぼ終了し、ソフト面の生活環境は未だ復興途上である。そして、自然環境は津波に加えて復興工事によって破壊され、その再生は自然のリジリエンスに委ねられている。

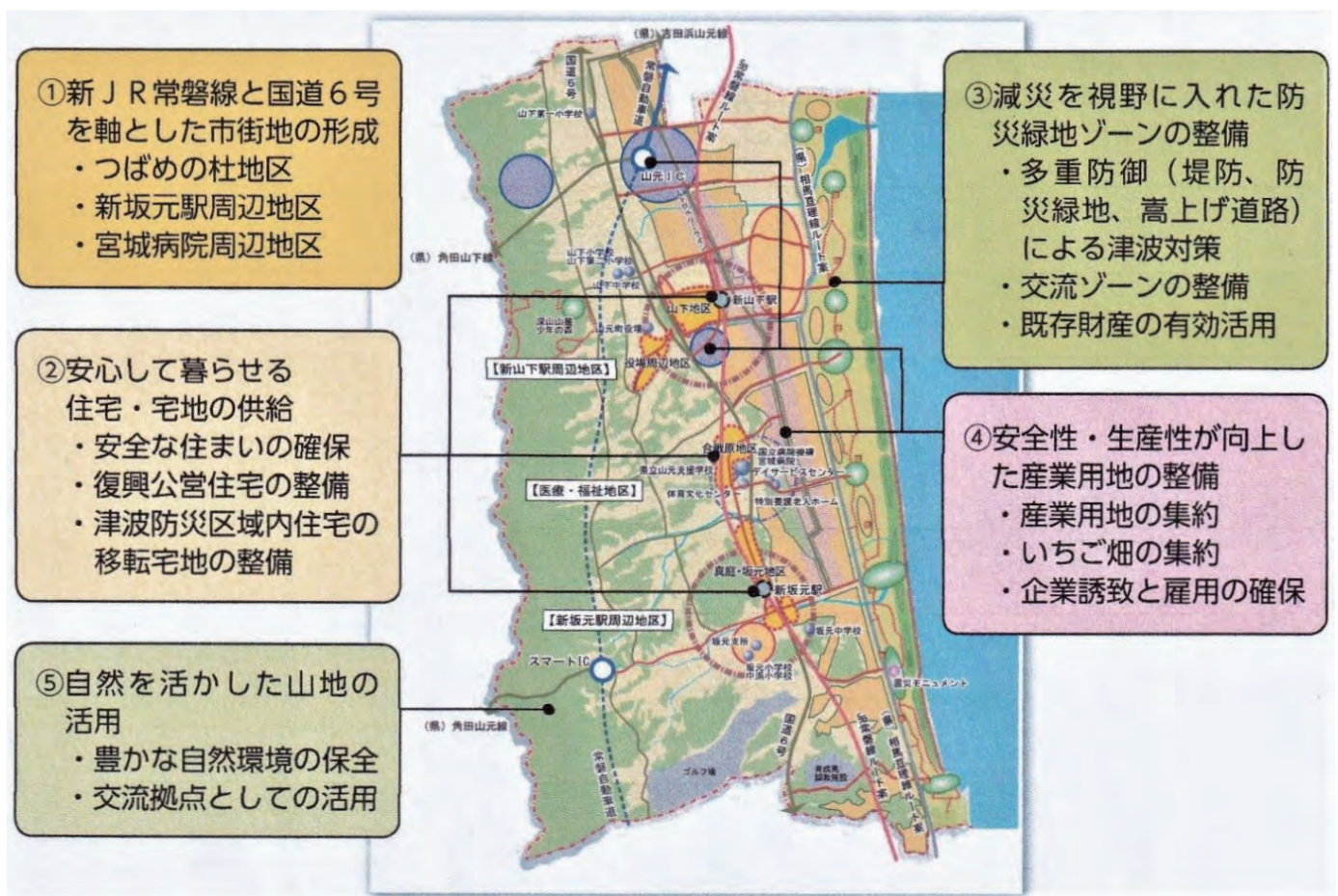


図1 山元町土地利用計画^{*2}

3. 山元町の津波伝承

東日本大震災・大津波による物的被害はいずれ回復するだろう。しかし、人的被害は決して取り戻すことができない。山元町の津波浸水域の人口 8,990 人に対し、死者 637 人はあまりにも多い。避難者 5,826 人の大部分は津波に遭って、かろうじて助かった人数であり、津波襲来前に避難した人はごく少数であった。つまり、津波浸水域にいた住民の大部分は津波を見てから逃げ、津波に吞まれて救助された。地震から津波襲来まで 60 分の時間があつた。地震 15 分後には大津波警報と避難指示が発令されていた。それでも住民は避難を開始しなかったのである。なぜ住民はすぐに避難しなかったのだろうか。震災後、住民は異口同音に、「津波が来るとは思わなかった」、「こんな大津波は知らなかった」と言うのである。過去の津波伝承が正しく理解されていなかった結果である。しかしながら、住民が愚かだったわけではない。気象庁でさえ大津波警報での仙台湾岸の予想津波高さは 3 m 以上としていた。これが当時の津波認識のレベルであつた。500 年、1000 年といった再来周期の大津波に対しては、財産は捨てて逃げるに如くはない。しかし、住民は防災教育や避難訓練だけでは避難できなかった。早期避難して人命を守るためには、過去の大津波を確実に伝承し、さらに未来へと伝える必要がある。

(1) 過去からの津波伝承

住民にとって他地域の津波伝承はよそ事であり、山元町には大津波が来ないと思い込んでいた。早期避難のためには地元の民間での津波伝承が大切である。残念ながら、住民は 400 年前の慶長津波、1000 年前の貞観津波を伝承していなかった。次に山元町の津波伝承を列举する。

①**民話**：「追越の堤」「マンゼロク」：伝承者庄司アイ（山元町民話の会）

東日本大震災前に語られることはまれで、収録もされていない。

②**記録**：『山元町誌』*³：明治三陸津波、昭和三陸津波の記録

『山元町誌』第二巻、『山元町誌』第三巻には収録されていない。

③**石碑**：「中浜の津波石碑」「磯の津波石碑」

朝日新聞社によって三陸全域に設置された明治三陸津波、昭和三陸津波の記録。

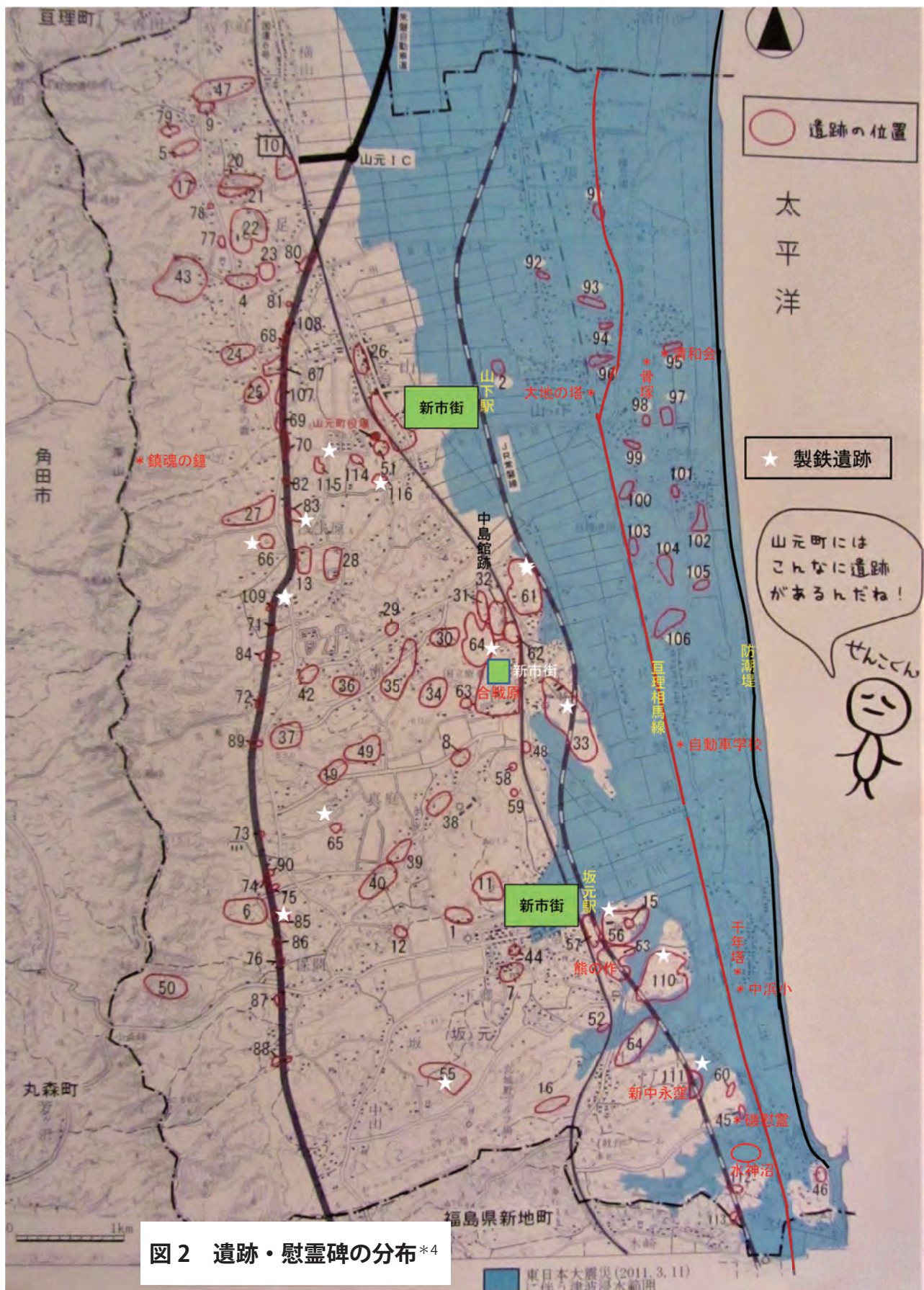
(2) 未来への津波伝承

2011.3.11 東日本大震災後の 10 年間に津波を記憶、記録した多種多数の情報や造作物が作られた。これらの津波伝承の媒体は時の流れとともに、忘却、風化、埋没、消滅して行く。果たして 500 年後、1000 年後にどれだけ伝承されているだろうか。東日本大震の津波経験を遠い未来へ伝承するためには絶えざる努力が必要となる。未来への津波伝承の媒体として主要なものを列举する。慰霊碑と遺構の位置は図 2 に示す。

①**語り部**：「やまもと民話の会」「震災語り部の会」

②**紙情報**：『山元町震災記録誌希望と笑顔が輝くまちへ』

『山元町震災復興記録誌復興の歩み』



『改訂増補民話』やまもと民話の会

『小さな町を呑み込んだ巨大津波』やまもと民話の会、小学館

『震災と民話未来へ語り継ぐために』石井正己、三弥井書店

『南三陸・仙台湾地域のジオツアーガイド』南三陸海岸ジオパーク準備委員会

③**電子情報**：「公的機関のサイト」「民間団体のサイト」「個人のサイト」

④**慰霊碑**：「山元町慰霊碑大地の塔」「磯地区慰霊碑」「中浜地区慰霊碑千年塔」

「清和会慰霊碑」「山元自動車学校慰霊碑」「深山鎮魂の鐘」「普門寺骨塚」

⑤**遺 構**：「中浜小学校」「水神沼」

4. 山元町の遺跡発掘

山元町の全域に多数の遺跡が分布し、縄文時代から現代に至るまで、この地域の繁栄を物語っている。良好な自然環境は住民の誇りであり、そこでの平穏な生活は想像さえしなかった巨大津波に呑み込まれ、住民は仮設住宅での生活に沈んでいた。そのような状況のもとで、膨大なインフラ復興工事にともなう緊急発掘調査によって出土した新たな遺跡に住民の関心が集まった。古代の高度な文化遺産の発見は嬉しい驚きであり、また発掘調査により復興工事が遅れないかと心配もあった。そして、貴重な文化遺産が復興工事によって失われたことが残念だった。その代表的な遺跡の写真をGoogleEarthで示す。

①合戦原遺跡*⁵

遺跡の位置は図2に示す。この場所は合戦原地区と呼ばれ、防災集団移転の新市街地になった。広い工事範囲から横穴墓群、古墳群、製鉄炉、木炭窯が出土し、多くの副葬品も発見された。中でも7～8世紀の38号横穴墓から発見された線刻壁画は注目された。この横穴墓は現地保存が検討されたが、様々な困難があり、残念ながら線刻壁画は取り出して保存されることになった。現在、取り出された線刻壁画は山元町の宝として歴史民俗資料館の目玉展示になっている。遺跡の一部は遺跡公園として保存されている。



②新中永窪遺跡*⁵

遺跡の位置は図2に示す。この場所はJR常磐線の内陸移転にともなって発掘調査が行われた。製鉄炉、木炭窯、焼物窯、鍛冶・ろくろ工房、住居集落がセットになって発掘された。中でも大規模な製鉄炉には目を見張った。ここには高度な技術を持った窯業の専門集団があり、高品質の鉄製品や焼物を大量に生産していたことが想像できる。”双葉郡から山元町の辺りは、古代日本における鉄製産の第二の核心地区であった”^{*6}ということも納得できる。現在、この場所は線路の切り開きになっている。



③熊の作遺跡*⁵

遺跡の位置は図2に示す。この場所はJR常磐線の内陸移転にともなって発掘調査が行われた。郡官衙跡、木簡、津波堆積物が出土した。郡官衙は亘理町だと思っていたので、山元町にあったことに驚いた。木簡からは年代の確定や製鉄との関連が解読された。津波堆積物は貞観津波のものであり、「日本三代実録」の記述が過大でないことを裏付けているようだ^{*7}。このような熊の作遺跡は山元町の古代製鉄の姿や津波伝承として大切な遺跡であるが保存はかなわず、現在は鉄道の切り開きとなっている。



④水神沼津波遺跡^{*8}

水神沼の位置は図2に示す。水神沼は絶好の地形にあり、有史前からの津波堆積物が保存されている。2006年には産総研の調査によって貞観津波堆積物が解明された。東日本大震災後の新たな津波堆積物が確認されている。民話や古文書による津波伝承について、水神沼の津波堆積物は大事な物証である。



5. おわりに

遠い昔の大津波を伝承することは極めて難しい。優れた民話収集とその語り部であった庄司アイさんは、「大津波の民話を現実として理解できていなかった」と悔やんでいた。水神沼の津波堆積物は2006年に調査が行われ、貞観津波の規模がわかっていたのに、2011年東日本大震災の防災には間に合わなかった。山元町だけで637人もの犠牲者が出たことは残念でならない。

震災後の発掘調査によって横穴墓の線刻壁画、古代製鉄遺跡、郡官衙跡と貞観津波跡が出土した。これらの遺跡は、震災後の喪失感の中で郷土へのアイデンティティを取り戻し、再建に向かう支えとなった。遺跡は震災伝承のためにも貴重な地域遺産である。それが復興事業によって発見されとはいえ、震災復興のために消滅したのは致し方ないことであろうか。

東日本大震災後、大津波に関する膨大な情報と物証が得られている。大津波の情報アーカイブ、津波遺構の保存、津波石碑、これらを遠い後世へ伝承して防災の糧としなければならない。山元町を含むジオパーク計画は自然現象ばかりでなく、東日本大震災の保存と伝承を目論んでいたが、実現しなかった。大津波から避難するためには、それぞれの地域ごとの民間伝承が大切であり、そのための「しかけ」や「しくみ」が必要であろう。

謝辞

この10年、たくさんの方々に助けられて震災復興ができたことを感謝します。

「お寺ボランティアセンター」（テラセン）に結集した皆さん。再建に踏み出し、ここまで進むことができました。

「国際ボランティア学生協会」（IVUSA）の皆さん。若い力は復興の推進力になりました。

「山元町震災復興土曜日の会」の皆さん。迷い、苦しみ、楽しみを共にして活動しました。

「里浜ネットワーク」の皆さん。多数の被災地が連携して復興を進めることができました。

谷口宏充先生はじめ「南三陸海岸ジオパーク準備委員会」の諸先生と共に活動できたことを感謝します。自然現象の学習、震災伝承、防災教育、地域振興などの良い勉強になりました。そこで得た知識がこの発表の基礎になりました。

この研究会の発表に当たり、相原淳一先生には山元町の遺跡について教え受け、発表の機会を与えていただいたことを感謝します。

引用・参考文献

- * 1 『希望と笑顔が輝くまちへ 東日本大震災震災記録誌』：山元町：平成 25 年
- * 2 『震災復興記録誌 復興の歩み』：山元町：平成 30 年
- * 3 『山元町誌』：山元町：昭和 46 年
- * 4 山元町歴史民俗資料館の展示図をもとに作図
- * 5 「発掘調査現地説明会資料」：山元町教育委員会：平成 25 年～ 27 年
- * 6 『山元町での鉄製産に始まる古代東北の物語』：菊地文武：平成 24 年
- * 7 「再考貞観津波—考古学から「津波堆積物」を考える—」『考古学研究』第 68 巻第 1 号：相原淳一：2021 年
- * 8 『南三陸・仙台湾地域のジオツアーガイド—東日本大震災による災害遺産を通じて自然の驚異を理解し防災を学ぶ』：南三陸海岸ジオパーク準備委員会編：2016 年